新世界デフラグ機構

草木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新世界デフラグ機構

【Ｎコード】

Ｎ９５３２Ｖ

【作者名】

草木

【あらすじ】

ある日突然断片化した亜空間に呑み込まれてしまった神士と楡里の升崎兄妹。彼らが漂流生活を送る最中に出会ったデフラグ機構の科学者山之辺祥一は、世界を改変する装置（アラヤシキ）を起動させる。　新たに再構築された世界は、どこか懐かしい趣きの剣と魔法のファンタジー。見習い騎士の少年ティランの前に、奇妙な服装の賊たちが現れる。圧倒的な力を誇る異世界からの闖入者を前に、苦戦を強いられる騎士団。賊たちの目的とは？　果たして世界の再編は成されるのか？

#001

……食べられた。

盗み食いされたのだ。

押し入れに隠しておいたクッキーを兄に食われたと知ったとき、升崎楡里（しょうざきゆうり）は心の底から激怒した。

「わたしのクッキー……」

思わず、封を切られたクッキー缶の中を見つめる。

食糧難のこの時代、未開封のクッキーの缶詰は、本当に貴重品だ。

最後の最後、どうしても我慢できないときのために大切に取っておいたのに、まんまと兄に横取りされてしまった。

あのアホたれ兄貴。とっちめてやるんだから。

楡里は拳を握りしめる。

「ちょっとおにい！」

楡里は兄の六畳間へと踏み込んだ。

畳に敷かれたせんべい布団に寝そべる兄のシャツの胸ぐらを掴み、乱暴に揺すぶった。

「んー……寝てたんだが」

「なんでわたしのクッキー食べちゃうの！」

「ああ、あれか」

「あれかじゃないよ！　バカ！」

最低！　と楡里は怒鳴ると、クッキーの空き缶を振りかざし、兄である升崎神士（しょうざきこうじ）の眉間を殴打した。

いくら石頭自慢の神士とて、スチール缶で眉間をひっぱたかれると地味に痛い。さらに妹は執拗に連打してくるので、小さな痛みが蓄積して結構なダメージ量となる。

「おい楡里、あんま叩くなよ。お兄ちゃん眉間割れちゃうぞ」

「むしろ割れろっ！」

許しを請うためあえて可愛らしく言ったのだが逆効果だった。楡里は攻撃の手をゆるめるどころか、さらに勢いを増して滅多打ちにしてくる。

（そろそろおれの眉間の毛細血管がヤバイ）

慌てて誤魔化しを口から並べ立てる。

「まあ、そのなんだ。『せっかくだから押し入れの掃除でもすっかあ』とかおれにしては殊勝な考えを起こして中を掘り返してたらだな、偶然そいつを見つけちまってさ」

「だからって勝手に食べるなんて……。小学生ならまだしも、大学生にもなって」

そう言うおまえは高校生にもなってみみっちいな、と神士は言おうとしたが、今度こそ頭の形が変わるまでタコ殴りにされそうだったので黙っておいた。

「済まん。腹ぺこだったんで、つい」

「最悪。弁償しろ」

榆里が強い口調で迫る。

ひとくちも食べられなかったのが、よほど口惜しかったのか涙目だ。

どこの家庭でもそうだが、妹という生き物は甘いものが大好物だ。兄が勝手に食べようものなら、それこそ火がついたように怒る。土下座しろ、代わりに買ってくるまで家に入るな、などと鬼の形相で迫ってくるのなど、日常茶飯事だった。

以前だったら、神士だって喜んで榆里の代わりに近くのコンビニまで買い物に行っただろう。

いや、そもそも以前の平和な世界のままだったら、盗み食いなどと恥ずべき真似はしなかったはずである。

「弁償しろったって、なあ」

神士は困惑気味に首をすくめる。

「金ならいくらでも払うけどさ。こんな世界で、金なんて役に立つのか？」

「それは……そうだけど」

それまでの勢いはどこへやら、非情な現実を突きつけられ、榆里は黙りこくる。

「ま、尻を拭くんなら別だけどな。日本銀行券でケツ拭くなんざ、成金の極みだよな」

神士はベランダに放置しっぱなしの札入れをわざわざ持ってくる。

そしてなんとなく見せびらかす。

「わ、大金。おにい超リッチじゃん」
「あの日、バイトの給料日だったんだよ。ほら、駅前の居酒屋の深夜勤のさ」
「ああ、あそこね。このお金、お給料全額ひき下ろしたの？」
「まあな。おれ、次の日からダチとキャンプ行くつもりだったしさ」
「……そっか」

楡里が沈鬱な顔でうつむく。
あの日、あの異変に巻きこまれることさえなかったら、神士は琵琶湖へキャンプに出かける予定だったのだ。
だが、その望みが叶うことはなかった。おそらく、この先も二度とキャンプに行く機会は訪れまい。なにしろこの異常事態である。

断片化。

あるいは世界断絶。

突然、首都圏を襲ったこの未曾有の現象は、そう呼称された。
誰が最初に呼びだしたのかは定かではなく、いつしか自然と漂流民たちのあいだでその呼び方が定着したのだった。
升崎兄妹が住み家ごとこの亜空間に呑み込まれてから、今日でまる二週間が経つ。
その間、何人かの漂流民と遭遇したが、この異常な事態に対する合理的な説明を行える者は、誰ひとりとして居なかった。

（断片化の真相も気になるけど、切実なのは当面の食料問題だよな）

二週間のうちに冷蔵庫の食材や床下収納の乾物類は、ほとんど食べ尽くしてしまった。今は残りわずかな食料を、二人で分け合って

細々と食いつないでいる。
そこへ神士が抜けがけして盗み食いを働いたのだ。楡里がクッキー缶がへこむほど兄を殴るのも当然だった。
「うう、わたしのクッキー。ほんっとおに大事に取っておいたのにさ」
ふたたび悲しみが襲ってきたのか、楡里がめそめそする。
「お菓子くらいで泣くなよ」
「泣くよ！　これが泣かずにいられないよ！」
盗み食いをしておきながら、謝罪の言葉すらなく開き直る。
神士の横暴さを糾弾すべく、楡里は恨み辛みのこもったきついジト目をする。
長年、兄妹喧嘩をしてきたので、楡里はジト目が得意である。
得意どころか、この頃はジト目をする回数が増えすぎて、常時ジト目がちのガラのわるい女子になってしまったのが悩みの種だった。
「そう怒るな。そのうち、もっと美味いもんをたらふく食わしてやるよ」
「そんな約束、あてになんない」
「なるなる。おれの座右の銘は有言実行だからな。どんとこいだ」
「どこが！」
「まあまあ、怒るな怒るな」
神士はまるでわるびれる様子もなく、ふくれっつらをする楡里の頭を撫でる。
「やっ、頭撫でないで」

「おまえ、ちっちゃい頃から頭撫でられるとすぐ眠くなるもんな」
「ち、違う。これはただの条件反射なんだから。別に撫でられても嬉しくなんか……」

などと言いつつも、みるみる楡里の態度が柔らかくなってゆく。
神士に撫でられると、楡里は甘いミルクを飲んだときみたく、ほうっとした眠気に誘われる。
子供の頃、泣きじゃくるたびに神士に頭を撫でられてきたので、高校生になった今でも撫でられると気持ちが落ち着く癖がある。それを利用されたのだ。

「むー、眠くなってきた」

条件反射をまんまと悪用されていると知りながらも、まんざら不満でもないらしく、楡里は目をとろんとさせる。

「おう、寝ろねろ」
「うー、これは血糖値が低すぎなんで、別に撫でられて眠くなったとかじゃないんで、勘違いしないでよね」

などと言い訳がましく横になる。栄養不足と頭撫でなでのダブルコンボは効果てきめんだ。しぜんと楡里の整った二重まぶたが垂れさがってくる。

（よしよし、なんとか言い逃れたぞ）

妹がうとうとしだしたのを見て、神士は内心ほくそ笑んだ。
これで楡里が眠ってしまえば、クッキーの件はうやむやだ。目が覚める頃には、生来諦めの良い性格の楡里は、それ以上追及してはくるまい。どのみち食べてしまったものは取り戻せないのだ。

妹を布団に入れると、神士はベランダのガラス戸を閉めた。
すきま風が吹いて、寒さで楡里が風邪をひくといけない。

「……相変わらずシュールな光景だな」

ふと手をとめ、思わず独りごちる。
升崎家のベランダの向こう側は、見慣れたご近所の風景ではなく、橙色をした広大な空間が広がっている。

亜空間。

地球上ではない、どこか別の場所。

この亜空間を宇宙にたとえるなら、さながら升崎家は茫漠たる大宇宙に浮かぶ、ちっぽけな小惑星のようなものだ。
惑星なら、まだ決まった周回軌道が存在するけれど、升崎家の場合は完全な根無し草で、亜空間内をあっちへふらふらこっちへふらふらしている。
そういう意味では、ＮＨＫの人形劇として有名な『ひょっこりひょうたん島』に近いものがある。さながら升崎兄妹は、島に取り残された博士たちのようなものだ。

（しかし、この世界にはどうしても慣れないよなあ。世田谷のど真ん中から、オレンジ一色の世界だもんなあ）

のっぺりと均一な亜空間を見つめ、神士はため息を吐く。
もちろん、最初の衝撃から二週間が経過して、当初の驚きや混乱、困惑などは薄らぎつつある。
この亜空間で妹と二人きりで生きて行く覚悟も（不覚ながら）固まってきた。

しかし、二十四時間ほんのりと明るいこの不気味な世界に対する違和感は、たったの二週間そこらで払拭できるものではない。
その点では、神経質な神士より、お気楽な楡里の方が適応力がある。

「しかし楡里のやつ、マジ切れしてたな。女子はスイーツに関しては歯止めが利かないもんな」

その貴重な甘味の、最後の一つを勝手に食べてしまったのは軽率だった。
ちょっと身勝手すぎたか、と今さらながら自分のおかした行為が後ろめたくなる。

「……なんか釣ってくるか」

まるくなる妹の上から羽毛布団をかけてやると、神士は気持ちを切り替えて、食料調達に励むことにした。

× × ×

シーツを細く裂いて三つ編みにした縄。
通称シーツ縄。
それが今の神士の命綱だ。
ベランダの赤さびまみれの欄干に、シーツ縄の一端を結わえると、神士はおもむろに欄干によじ登る。
すーはーと深呼吸をする。

（よし、準備完了）

神士は欄干を蹴ると、渾身の力でもって亜空間へと跳躍した。
ジャンプした瞬間、家の重力にひっぱられて体がひっつるが、ひとたび升崎家の重力圏を離れると、たちまち全身が軽くなる。
たとえるなら、全身の血肉の代わりに、水鳥の羽毛か何かを詰め込まれたかのようなとびっきりの軽さだった。
亜空間内は、宇宙空間のような無重力ではなさそうだったが、どうした作用か、家などが建つ《地所》から十数メートルほど離れると、限りなく無重力に近くなる。
重力のくびきを逃れて身軽になるのはなかなかの感覚だったが、そのままだと宇宙船から切り離された宇宙飛行士よろしくどんどん離れて行ってしまうので命綱が必要となる。

「おっ、今日はいろいろ流れ着いてるぞ」

亜空を漂うゴミの中を、神士は慎重に泳ぎ進んでゆく。
亜空間には、断片化によって生じた大量の瓦礫やゴミなどが浮かんでいる。ふたたび宇宙の喩えを出すなら、さながらデブリのような状態だ。
バルクと呼ばれるそれらのこまごまとしたゴミは、元の世界から亜空間へと持ち込まれたものだ。
升崎家のように、建物の外観を完璧に保ったまま亜空間へ呑み込まれるケースはまれで、大半の建物は地盤から強引にひき裂かれ、粉々にされた状態で運ばれてくる。
その結果として、亜空間にはおびただしい量のゴミが漂流してしまっている。
普段は漠然と辺りを漂っているのだが、家のような巨大な《地所》が傍を通ると、重力に引きつけられて周辺軌道から大量のバルクが集まってくる。
そのバルクを選別して、食料品や生活必需品などの価値のあるものを集めるのが神士の日課だった。

（ゴミ拾いってのは大変な仕事だよな）

中学生の頃、夜になると近所のゴミ捨て場から資源ゴミを盗んでゆく浮浪者に対して内心言い知れぬ嫌悪感を抱いていた。

だが、いざ実際に自分がおなじ立場に立たされると、彼らの気苦労がよくわかる。

ガラクタの山の中から、価値のある品を探し出すのは気の遠くなるような地道な作業だ。ゴミを大量に集め、ひたすらそれを弄る作業のみじめさは、実際に体験した者でないと分からない。

辺りを浮遊する無数のゴミを、落ち葉かき用の熊手でかき集める。そのほとんどがゴミだが、ときどき未使用の乾電池や食料の缶詰などのまぐれ当たりが引っかかる。

「ほんと、労多くて報いの少ない仕事だよな」

ゴミの塊を突き崩しながら、神士は誰ともなくぼやいた。

飽き性の神士としては一時間ほどで嫌気がさしてくるのだが、この仕事に二人分の命が掛かっている以上、飽きようとダレようとやり続けなくてはならない。

（ま、仕事ってのはそんなもんか）

この日、四時間ほど黙々とバルクの山を漁って、ようやくトマトと桃の缶詰が一個見つかった。腰を痛め、手足のだるくなる重労働の対価としては、悲しくなるほどの実入りの少なさだった。

「ったく、やってらんねえよ」

「おにい、お疲れ」

缶詰を抱えて命綱をたぐって戻ると、お昼寝をおえて目をさまし
た楡里がベランダまで出迎えてくれた。

「ほらよ、トマトの水煮缶」
「あ、トゥメイトゥだ。凄い」
「凄くねえよ。消費したカロリー考えたら割りに合わないっての」
「でも、美味しいよ？」
「まーな」
「ツナ缶あと一個残ってるから、これで合えて食べよっと。せっか
くだから、小麦粉練ってイタリア風すいとん作ろっか？」
「任せる」

神士は汗だくのシャツを脱ぎ、団扇でせわしなくパタパタ扇いだ。

「おにい汗すごっ。待ってて、今タオル持ってくるからね」
「汗くらい自分で拭くよ」
「だめだよ。お風呂入れるほど水ないんだし、臭くなったら一緒に
いるわたしがヤダ」
「理由そっちかよ」

口をへの字に曲げる神士のたくましい背中を、楡里はかいがいし
く丹念に拭く。
少しの間、二人無言になる。
神士はちらと妹を見ると、

「さっきはわるかったな。ごめん」
「……ん」と楡里は目をそらした。
「代わりっちゃあなんだが、お詫びだ」

神士は肌着にくるんで隠しておいた桃の缶詰を出して、楡里に手

渡した。

「わあ、美味しそう！　食後のデザートにもってこいだね」
「おまえが全部食ってくれ」
「えっ、どうして？」
「おれ桃アレルギーなんだよ」
「……なんですぐバレる嘘吐くの。そういうの良いから、半分こにしようよ。一緒に食べた方が美味しいに決まってるもん」

榆里は肩をすくめる。

「おまえ大人だなあ」
「おにいが子供すぎんの！」

榆里はわざとらしくしかめっ面をすると「……ホント勝手なんだから」と少し甘えるような調子で兄の背中にぴとっとひっついた。

#002

運命のあの日、神士が大学から帰ると、珍しく楡里の方が先に帰宅していた。

「ふぃ、ただいま」

「あ、おかえり〜」

楡里が居間のソファーにだらしなく寝そべって、再放送のドラマを観ながらポテトチップスをつまんでいる。

「また菓子ばっか食って。そのうちぶくぶくに太るぞ。肉里になるぞ」

「肉里ってなによ。ドラマいいとこなんだから邪魔しないで」

しっしと手で追い払うと、寝転んだままもぞもぞと菓子の袋に手を入れる。

「なあ楡里。おふくろは？」

「スーパーで買い物」

「ふーん」

冷蔵庫からよく冷えた麦茶を出してコップに注ごうとした。

その瞬間、

世界が一変した。

「な、なんだこの光は？」

ふと外の景色が明るくなって、窓辺から大量の光が差しこんだ。

訳も分からず、兄妹揃って棒立ちになる。
家の周囲に光の壁のようなものが出来、それが家全体を包みこむようにして迫ってくるのが窓ごしに見える。

「な、なんなのこれ？」
「分からんが……」
「おにい怖い」
「慌てるな。おれが様子を見てみる」

ソファーで身をすくめる楡里。
神士が窓を開いてよく確かめようとした瞬間、光が室内を満たし、兄妹の視界をすさまじいまでの明るさで灼き尽くした。
気がつくと、神士も楡里も気を失って床に伏せっていた。どれだけ時間が経ったのか、手足が痺れてめまいと吐き気がした。

（くそ、一体なんだってんだ）

神士はこめかみを抑えながら立ち上がる。
現在時刻を確認しようとしたが、腕時計と部屋の置き時計の時刻がバラバラで、正確な時刻が分からない。テレビをつけようとしたが、電気が通じてないらしく、リモコンを押しても反応しなかった。

「おい、冗談だろ？」

神士は呆然と窓辺に立ちつくした。
窓の向こうにあるのは、見慣れた隣の家のブロック塀ではなかった。
どこまでも無限に広がるオレンジ一色のふしぎな空間だった。
のっぺりとした均一な橙色。

それが三百六十度、家の周囲をまんべんなく覆っている。
まるで仮想現実の世界に連れて来られたかのような気分だった。

「これは夢なのか？」

魅入られるようにして外に出ようとして、

「つっ！」

思わずたたらを踏んだ。
頭のどこかで理性が待ったをかける。
このまま《外》に素足で飛び出して大丈夫なのか？
せめて靴でも履くべきではないだろうか？
そんな常識が働いた。
結果的に、それが神士の命を救った。
もしあのまま命綱もなしに亜空間に飛びだしたなら、そのまま永久に家を離れ、亜空の迷い子として餓死したはずである。
そう考えると今でもぞっとする。
自分一人なら、こんなくそったれな世界で野垂れ死んだところで未練はない。
だが、楡里がいる以上、先に死ぬことは許されない。どんな絶望的な状況におかれようと、妹のためにも生きて生きて生き抜く。
たとえ炭を嘗め、泥を啜ることになろうと、最後の最後まで悪あがきをし続ける。兄として妹にしてやれることは、今となってはそれくらいしかなかった。

× × ×

世界各地で断片化が頻発している、というニュースは、以前にも何度か耳にした。
が、その実体となると、どのマスメディアも口を濁し、面だって報道することはほとんどなかった。
おそらく報道規制が敷かれているのだろうが、こうして巻きこまれるまで、神士たちも他人事のように考えていたふしがある。

「もし東京二十三区がまるごと亜空間に呑み込まれたとしたら、今ごろ向こうの世界は大騒ぎだろうな」
「だよねえ」
「無事戻れたら、おれたち一躍時の人だぜ。きっと引っ張りだこだろうなあ」
「戻れたら、ね」
「悲観的だなおい」
「悲観的にもなるって」

退屈しのぎに、神士と楡里はだらだらとリビングで雑談をして一日をすごした。
亜空間に迷い込んでからというもの、家族の会話が増えた。
テレビやインターネットから切り離され、電気も使えないとなると、読書か音楽鑑賞、あとは会話をするくらいしか楽しみがない。
だからこの二週間、ひたすら毎日雑談をした。兄妹でこんなに話をしたのは、楡里が幼稚園児の頃以来だった。
そうして雑談をしながら音楽を聴いた。災害に備えて電池の備蓄はあったから、日に数時間ほどクラシックをかけて、気分転換を図ることにしたのだ。
楡里がＭＰ３プレーヤーをスピーカーに接続して再生ボタンを押すと、ベートーヴェンの「田園」や「春」の優雅な旋律が流れだした。

「こういう異常事態のときは、邦楽よりはクラシックの方が馴染むな」
「分かる分かる。音楽あると違うよね」

安物のスピーカーなので音が不明瞭だったが、室内が音楽で満たされると、亜空の殺伐とした雰囲気が和らぐ。この点はヘッドホンでは真似できない芸当だ。

クッキーの件の反省をいかして、ここ二、三日はなるべくお互いが楽しい気分でいられるように気を遣った。

二人きりの生活がこの先もずっと続くだろうから、お互いにぎすぎすしたくない。

食べ物を分け合ってるんだから、ついでに楽しい気分も分け合おうと、どちらからともなくそう決まった。

ちゃんと元の世界に帰れるかどうか、両親は無事かどうか、などのつらくなるテーマはなるべく避ける。

なので話題の大半は楡里の高校での話や、神士のバイト先や大学での体験談などの無難な内容だった。

そうやって昔話に花を咲かせながら、日に二度すいとんを作って食べた。カセットコンロに常備してあるミネラルウォーターを入れて煮炊きを行う。

この数日、神士が何度となくゴミ拾いを敢行し、缶詰やインスタント食品などをコンスタントに集めたので、当面の食料事情はどうにかなる見通しが立ったのだった。

× × ×

この亜空間には、升崎兄妹が暮らしている一軒家のような土地が無数にある。

そうした土地は《地所》と呼ばれている。無人の土地から、集団で暮らしているものまでさまざまだ。
あらゆる物体が、亜空風の吹くままにあてどなく動きまわるこの世界では、どんな物体であろうと一期一会だ。
一度出会ったものと再び遭遇するのは天文学的な確率だ。
ありとあらゆるものは目の前を通過し、永久に姿を消す。
ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。
だからめぼしいバルクや地所を発見したときは、なるべく探索しておくべきだ。
有用な品が手に入るかもしれないし、何より他の生存者　漂流民と話をするのは、最高の気晴らしになる。
むろん、他の地所を訪れるときは細心の注意を払わなくてはならない。
あらゆる人間が善良との保証はなく、中には敵意を持った漂流民もいる。
他人の地所を荒し、漂流民を殺して強奪する悪辣な輩だっているのだ。

「物騒な世の中だもんね」
「まあ、一億総サバイバルゲームな状況だからな。他人を蹴落としてでも生き残ろうとするのは、ある意味しごく真っ当だ」

無政府状態の亜空間では、害意を持つ人間からは自衛しなくてはならない。
むろん、地所の接近や離反は、土地に乗っている人間の意志でどうにかなるものではないので、争いはきわめて偶発的、散発的なものではある。
だが、万が一ということはいつだってあり得るので、準備は怠らない。
神士も他人と会うときは必ず包丁を腰に差して武装した。

「しかし、ここんとこまるで他人と出会わないな。一体この世界にどんだけの人間が流れ着いてるんだか」
「わたしら悪運尽きちゃったのかな」
「完全に尽きたら餓死一直線だな」
「その前に干からびてミイラになるよ」

榆里が水筒をちゃぷちゃぷ鳴らした。
食料はどうにかなったもの、そろそろ飲料水が乏しくなってきたので、誰かと物々交換をしたかった。
こちらも虎の子の食料を差し出さなくてはならないが、相手の台所事情によっては有利に出られる。もちろん、弱みを見抜かれて足もとを見られる懸念もあったが。
が、どちらにせよ他人と出会わなくてははじまらない。こればっかりは運を天に任すしかなかった。

「おにい」
「うん、どうした？」
「喉渇いてるでしょ。お茶どうぞ」
「フロ茶か」

榆里が淹れてくれた湯呑みの焙じ茶に口をつける。

「美味い……んだけどなあ」

フロ茶というのは、お風呂の残り湯を沸かしなおしてお茶を淹れたシロモノだ。浴槽に残っていた湯を、榆里がやかんに詰め直してお茶にしたものだ。
父親がつかった風呂の水だと思うとゲンナリするが、背に腹は代えられない。躊躇うと辛いので、一気にごくごく飲み干した。

×　×　×

「しかし、本当に何も見つからん」

神士はベランダに立って亜空間を眺める。
かれこれ三日間、昼寝を挟みながら哨戒を続けている。あんまりオレンジ空間を凝視しすぎたため、いささかドライアイ気味だ。

「あんまり根を詰めないでね」
「ほどほどで切り上げるよ」

楡里がお盆を手に部屋に戻る。
肩をこきっと鳴らし、気合を入れ直して監視を続けるかと振り向いた瞬間、神士は思わず硬直した。

（でかっ！）

升崎家の正面めがけて、巨大なコンクリートの塊が迫ってきている。

（いや、違う。向こうが近づいてるんじゃなく、こっちが引っぱられてるんだ！）

どうやら巨大地所の重力に引っぱられ、升崎家自体が近づきつつあるようである。

「まずいぶつかるぞッ！」

慌てて部屋に戻ると、きょとんとする楡里をベッドに押し倒した。
「きゃあ！」
「おれと布団に入れ！」
神士は問答無用で楡里を羽毛布団の中へ押しこみ、自らも隠れた。
「おにい待ってまだ心の……」
「でっかい地所に引っぱられてる。衝突するぞ、頭を抑えて丸くなってろ！」
「えっ、ええええっ！」
神士は楡里の頭を胸に抱きかかえると、ぎゅっと目を閉じて妹を強く抱きしめ、ショックに備えた。
数秒後、建物解体用の鉄球がぶちかまされたような衝撃が走り、家の壁が大きくひしゃげた。向こうの地所の一部が、升崎家の和室の壁にめり込んだ。
二人は激しくベッドから投げだされた。震える楡里を抱きながら、神士は戸棚から落ちてくる段ボールなどを背中で受け止める。
（ってえ）
羽毛布団で軽減されたものの、肩胛骨に鈍い痛みが走る。もろに直撃したらと思うとぞっとした。
やがて揺れが収まった。
「……止まったか」
震動が完全に止まったのを見計らうと、神士は羽毛布団から這い

だした。頬を真っ赤にした楡里が、もじもじしながらぴょこんと可愛らしく首だけ出した。

「ふう、間一髪だったな。まるで氷山に衝突したタイタニック号だ」

衝突の衝撃で家具は倒れ、窓ガラスは粉々だった。とっさの判断だったが、羽毛布団に隠れたのは上出来だった。

「胸、触った」

「ん？　ああ、慌ててな。ごめん」

「別に」

楡里がぷいっとそっぽを向く。

家の被害状況を調べようとした神士は、だが目の前に広がる光景を前に圧倒された。

「なんだこいつは？」

コンクリートの塊が和室の壁一面をぶち抜き、家全体に生じた亀裂は廊下の隅にまで達している。大黒柱がしっかりしているおかげで倒壊を免れているが、下手すると屋根が落ちて二人圧死しかねない状況だった。

「こりゃあ、家は捨てるしかねーな」

「どうするの？」

「さて、どうしたもんかな」

とりあえずぶつかった相手を調べる。

向こうの地所がぶつかった際、家の壁が壊れると同時に、向こうのコンクリート壁の一部も壊れてしまったようである。

痛み分けだな、と一瞬一矢報いた気になったが、明らかにこちらの損傷の方が大きいので、ぜんぜん痛み分けではない。

「……乗り込んでみるか」

向こうの壁の亀裂との隙間は、たかだか一メートル弱。飛び越えようとすれば、なんなく飛び越えることができる。

「この中、誰か住んでるのかな？」

楡里が頭をかがめて壁の穴を覗く。

「さあな」

神士は腰に鞘付きの出刃包丁を差すと、倒れた桐箪笥の下から防災袋を出してきて、ヘルメットを探しだしてきてかぶった。懐中電灯も持って行く。

「向こうに何が潜んでいるか分からないからな。おまえはここで待ってろ」

「やだよ、わたしも一緒に行く」

「危険かもしれないんだぞ」

「危険って言うなら、ここに残ってる方が絶対危険だと思う」

壁を削ぎ倒され、不安定な屋根を見上げて楡里がつぶやく。

「……たしかにな」

「どのみち危険なら、おにいと一緒の方が安心できるよ」

「じゃあ、後ろからついてこい」

榆里が出しゃばらないよう釘を刺すと、神士は懐中電灯のスイッチを入れ、真っ暗なコンクリートの穴を照らしだした。

#002（後書き）

週一程度の更新を予定しています

#003

巨大地所の内部は、何かの研究施設のようだった。コンクリート打ちっ放しの分厚い壁に四方を囲まれている。
中は薄暗く、懐中電灯の光芒で照らし出せる範囲に人間の姿はなかった。

「この建物、無人なの？」
「いや、それにしては空気が澄んでる。頻繁に人の出入りがあるんだ」

神士が鼻をひくつかせる。
空気によどみやかび臭さを感じない。

「なんだか暗くて怖い」
「懐中電灯、ちょっと暗いな」

防災用の懐中電灯なので、電池が古く、光りが弱々しい。その微弱な光で周囲を照らして居ると、心細さが際立った。

「……案外天井が高いな」

広々とした研究施設のあちらこちらに、用途不明の装置が並べてある。
装置は幾つかのケーブルによって中央の大型筐体に接続されている。ジュラルミン製の銀色の円柱だ。円筒の中央にモニタが設置され、静電容量式のタッチパネルがある。

「電源落ちてるな」

軽く触れてみるが、装置が動く気配はなかった。衝突の衝撃でブレーカーが落ちたのか、あるいは誰かが主電源を落としたのか。

「おにい、あんまり触ると怒られるよ」

「誰に叱られるって？」

「それは……分からないけど」

榆里が口ごもる。

「おい見ろ榆里。こんなものより、もっと面白そうなもんがあるぞ」

部屋の片隅に大型冷凍庫を発見して、思わず神士の声のトーンが高くなった。周囲の装置の電源が軒並み落ちているなか、一台だけコンプレッサーの駆動音がきこえる。

電源が入れてあるからには、中には冷凍保存を必要とする生鮮食品が入れてあるはずである。

「ちょいと覗いてみるか」

「ねえ、ここ誰か住んでるんじゃないの？　勝手に漁ってたら怒られちゃうよ」

「まあまあ。覗いてみるだけだから」

「おにいって、昔から友達んちの冷蔵庫とかを勝手に開けるよね。恥ずかしいからやめてってずっと言ってるのに」

だんだん話がずれてくる榆里をなだめ、神士はおもむろに冷凍庫のドアを開く。

吸盤を剥がすような音がして、冷気がどっと室内に噴出した。

「なっ……」

神士は思わず絶句した。

冷凍庫に保存してあったのは、十三、四歳ほどの少女だった。服を脱がされ、全裸のまま体育座りをした膝頭に顔をうずめている。

全身がこちこちに凍りつき、まぶたは霜が降りて真っ白だ。生前はさぞかし血色が良かっただろう頬は白く冷め、唇は熟した石榴のような黒さだった。

「し、死んでる……」

「本物なの？」

「わ、分かるもんか」

精巧な作り物じみた冷凍少女に、二人はさほど衝撃を受けることもなく、肩を寄せ合って囁き交わした。

思ったほどに恐怖を感じなかったのは、少女が生前と寸分違わぬ姿だったからだろう。何者かの手によって丹念に清められ、氷の中に塗り込まれた少女は、とこしえの眠りに安らいでいるかのような表情だった。

「ロザリア・ロンバルドみたいだ」

「誰それ？」

「屍蝋化したイタリアの少女だよ。体が鹼化して、死後も生前と変わらない姿のまま保存されてるんだ。まあ、分かりやすく言うと八つ墓村の地下のあれだ」

「へえ」

「まあ、この子の場合は単に凍っているだけだから、どっちかと言うと冷凍マンモスに近いな」

升崎兄妹は、冷凍少女をしげしげと見つめる。二人とも、目の前の少女に注意を奪われ、近寄る人影にまるで気づかなかった。

「私の娘だよ」

突然背後から声がした。

神士がぎょっとして振り向くと、白衣の男性が死角から現れ、不敵な笑みをうかべた。

「驚いたかね？」

「ああ」

楡里を背後に庇いながら、神士は努めてさりげない口調でうなずく。

まず、冷静に対応しなくてはなるまい。

彼が狂っているのか、どうか。

あるいは自分たちに危害を加える気があるのかどうかを冷静に見極めるべきだ。

「彩……母さんに似て美しい子だった。よく笑う子でね。こんな最果てに飛ばされたって、文句ひとつ言わなかった」

「ここに住んでいるのは、あんたとこの子の二人だけなのか？」

あえて過去形にしなかったのは、男を刺激したくなかったからだ。あるいはこの男の心のなかでは、娘はまだ「生きている」かもしれないと考えたのだ。

神士の下手な気遣いを見透かされたのか、男は皮肉めいた微笑をした。

「そうだ。組織を逃れてからというもの、ずっとここで暮らしてき

た。娘と二人でね」
「おにい。あの人、怪我してる」
榆里が小声で神士のシャツの裾を引っぱる。
男の左足は、倒れてきたスチールキャビネットに挟まれたのか、ひどい有様だった。ジーンズが黒く染まって、なおも鮮血が滴り落ち、歩くたびにスニーカーの中で血がぐじゅぐじゅと音を立てた。
「あんた、ひどい怪我だな」
「これか。先だっての衝撃で脚をやられてね。応急手当で止血はしたんだが、下半身がずたずたで早晩くたばる運命さ」
男が肩をすくめる。
榆里が顔をゆがめて目をそらした。
「お気遣いなく。もう痛みすら感じないんだ。恥ずかしい話だが、最初の激痛で失神してしまってね」
「おれたちの声で目覚めたのか」
「まあね。キミたちの方は無事だったの？」
男がひび割れた眼鏡を押しあげる。
自分の脚が使いものにならなくなる瀬戸際だというのに、男は落ち着き払っている。
神士たちに対して害意はなさそうだったが、その態度からは一抹の狂気を感じた。
「このラボにぶつかったの、キミたちの地所だろ。袖触れ合うも多生の縁と言うし、ちょっと力を貸してくれないか？」
「あんたの娘はどうして亡くなったんだ？」

神士が毅然として問いかけると、男は一瞬生気の抜けたような目で氷漬けの娘を見つめた。そして小声で、

「……若年性糖尿病の合併症だよ」

「インスリンが切れたのか」

「そうだ。おれたちが持参した分は、この空間を彷徨ううち使い果たしてしまった」

「……」

「最期は昏睡状態に陥って、そのまま逝ってしまった。あの子の母親と違って、苦しまなかったのがせめてもの救いだった」

男は血染めの白衣の胸ポケットから、よれよれの家族写真を出した。男の妻子が、どこかの児童公園で満面の笑みをうかべている一枚だった。

「何故、冷凍保存した？」

「キミなら、愛する人をこんな最果ての地に放りだすのか？」

男が静かに問いかけてくる。

娘を想う心情は理解できるが、その一方で娘の亡骸を冷蔵庫に詰める行為は、どこか狂っていると思われた。

肉体に痛みが戻ってきたのか、男はふうふう言いながらラボ内を歩く。そして発動機の電源を入れ、装置に電力を供給した。

「無茶するな。横になってろ」

「どのみち手遅れだ。立ってようと横になろうと、あと一時間ともたない。それなら、せめて最後に一矢報いないとな」

男は焦点の定まらない目で、タッチパネルにＩＤとパスワードを入力してログインする。

「そうそう、申し遅れたね。おれは山辺祥一。ここに呑み込まれる前までは、東工大で非常勤講師をやってた者だ。ま、今となっては身分なんぞなんら意味を持たんがね」

山之辺は升崎兄妹を代わる代わる見つめ、激痛をこらえてにいと破顔した。

「ま、今後ともよろしく頼むよ」

「何をだ？」

「すぐに分かるさ」

山之辺はそうお茶を濁した。

このときはまだ、この胡乱な男との付き合いが長いものになるなどとは、神士も楡里も想像すらしてなかった。

× × ×

「時間があるなら、一から説明してあげたいところだがね。あいにく、残り時間がわずかだ。片手間で説明させてくれ」

山之辺が装置に向き合いながら、血走った目でデータを読んでいる。痛みが強く、ときどき片膝をついて装置にもたれるが、気力を振り絞ってまた立ちあがった。

「やれやれ、血を失いすぎて頭がぼんやりとしてきた。いよいよ年貢の納め時か」

装置が低い駆動音を立てて動きはじめた。ステータスランプが点灯し、橙色だった光が点滅して緑色に変化してゆく。

「あんた、何をする気なんだ？」

「創世だよ」

無造作に答えて、円筒を動かした。

円筒の台座が動きだし、円筒そのものが目まぐるしく高速回転をはじめた。

どぅん、と肚に響き渡る音がする。

「なんだそれは。遠心分離器か？」

「遠心分離器か。なかなか傑作だな」

山之辺がちらと神士を見やる。

「だが当たらずと言えど遠からずかな。この亜空間に流入した元の世界の夾雑物から、世界再構築に適した物質を漉し取るという意味においてはね」

「どういう意味だ？」

「トランスクリプターの定義ファイルに関しては、もう少し精査する予定だったが、今となってはぶっつけ本番だな。プロトタイプ世界観を投入して、あとは経過観察フェイズから修正を加えるか」

ぶつぶつと意味不明なことを呟きつつ、山之辺は机の上のモバイル端末をタッチパネルに接続して、データを同期しだした。

やるべき作業に熱中しすぎて、脚の痛みすら忘れているような入れ込み具合だ。

「おっさん、ちょっと待てよ」

「おっさんとは失敬な。こうみえておれはまだ二十代後半なんだがね」
「あんた、一体何をしてんだ？」
山之辺は一瞬きょとんとして、一呼吸おくと逆に向こうから質問をしてきた。
「キミたちは、現状についてどの程度把握している？　この世界についてどの程度知っているか？　と言い換えてもいい」
「どの程度って」
神士は困惑して答えに詰まる。
ある日突然、未知の光に呑まれ、右も左も分からないままここへ連れてこられた。兄妹で力を合わせて今日まで生きのびてきた。この亜空間に呑まれて、まだ二週間あまりである。そんなことを簡潔に話した。
「ふうん、だとまったくの新入りなのか」
「あんたは？」
「おれと娘がこの空間に転移してから、かれこれ一年半近くなる。以前はデフラグ機構という組織の下で、ある研究に携わっていた」
「デフラグ機構？」
「まあ、話すと長くなるんだが、要点をかいつまんで話すとだな。娘のインシュリンを探すために、同志を裏切って組織から抜けだしたんだ。まあ、一種の抜け忍だね。おれは組織内でも重要なプロジェクトのリーダーでね。おれに抜けられると彼らは困るのさ」
組織の幹部たちは、山之辺がインシュリン探しの旅に出るのを許可しなかった。秘密が漏洩することをおそれたのだ。
そこで山之辺は賭けに出た。このまま薬の在庫が尽きてみすみす

娘を死なせるくらいなら、と親子二人で組織のある地所から脱走を図ったのだ。
残念ながら、謀叛の甲斐もなく、娘の彩はインシュリンを手に入れる前に亡くなった。彼は失意にのまれ、娘の亡骸を前に二晩泣き明かしたそうである。
だが、たとえ娘が亡くなろうと、デフラグ機構はユダである彼を決して許しはしない。地の底まで追いかけて制裁を加える。

「ま、当然だがね。なんてったって、八割がた完成した装置を、おれが無断で持ち去ったんだから、彼らが怒るのは当然だ」
「持ち去った？」
「そうとも。この《アラヤシキ》と《トランスクリプター》をね。この二つの装置なしには、新世界を創世することは叶わない。やつら、今ごろ血まなこになっておれを探してるんだろうなあ」

山之辺はさも愉快そうにくくと笑うと、

「彼らがおれを探し当てる前に、おれは死ぬから問題はないがね。さて、そろそろ装置を動かすぞ」

神士は困惑して、山之辺の作業を見守る。
何やら判然としなかったが、山之辺が組織から奇妙な装置を持ち逃げし、今それをここで起動させているのは理解できた。

「っつう……ああ、そろそろ本格的に意識が朦朧としてきたぞ。モルヒネがあると助かるんだがな」
「一体何を始める気だ？」
「だから創世だよ」
「創世？」

声を荒げる神士を、山之辺は穴が開くほどまじまじと見つめる。

「キミ、案外バカなのか？」

「なっ」

「では訊こう。キミが元いた世界、すなわち僕らの愛すべき地球は、今ごろどうなってると思うか？」

「どうなってるって」

「こいつは組織の試算だが、現時点で、地球の二十八パーセント前後の土地が、この亜空間に呑み込まれた計算だ。その数値は年々増大し、約七、八十年後には、地球はおろか、太陽系、銀河系、ひいてはあの宇宙そのものが消滅する」

「宇宙全土が亜空間に呑み込まれてしまうということですか？」

それまで沈黙を守っていた楡里が尋ねると、山之辺は「その通りだよ」と嬉しそうな顔でうなずく。

「キミたちが亜空と呼んでいるこの空間は、所謂平行宇宙の結節点だ。正確には点ですらないのだがね」

「結節点？」

「分かりやすく喩えるなら、ここは扇のかなめだ。われわれの宇宙を、かなめの部分から伸びる扇の骨だとするなら、そのおおもととなる部分だ」

「無限大に存在するすべての平行宇宙が重なり合っている地点ってことか？」

「ご明察。ここを起点としてビッグバンが発生し、われわれの宇宙が誕生したんだ。いわば森羅万象あらゆる可能性の出発点だな」

「途方もない話だな。頭痛くなってきた」

「おなじく」

と楡里もしかめっ面をする。

「最新の宇宙理論によると、宇宙同士というのは氷の詰まったアイスティーのようなものでね。氷が多い「冷えたお茶」のうちはどんどん拡大するが、どこかで温度にむらが生じて「ぬるいお茶」の部分が出来ると、しだいにどこかの宇宙で縮小が始まる。すると、生じた隙間に他の平行宇宙が引っぱられ、また別の宇宙が縮小し、というようなドミノ倒しが発生するんだ」

山之辺がタッチパネルを押すと、インジケータが表示された。作業の進捗度合いを示すグラフがじりじりと伸びて行く。

「最終的に、すべての宇宙はクランチして、単なる均一のぬるいお茶となる。そうなるのを防ぐため、亜空間に取りこまれた科学者たちが立ちあがって《デフラグ機構》なる共生共栄の組織を立ちあげた。彼らの目的は、崩壊してしまった世界を捨て、かつての神に成り代わって世界を再創造することだった」

「世界の再創造……」

「だからデフラグ機構なんだ。断片化してバラバラになった世界を、われわれの手でデフラグして新しくつくりなおす。言わば、元の世界の精巧なエミュレータになる予定だったんだ。おれが反乱しなければね」

「あんたが何かしたのか？」

「おれはね、どうにも現代史の忠実な模倣とうのは我慢がならないのさ。どうせ世界を再構築するなら、もっと面白くしたいと思うのは当然だろ？」

山之辺がウィンクをした。

「例えば、剣と魔法のファンタジーとかね」

と、タッチパネルのインジゲータが右端に達し、すべての準備が完了した。

「よし、これでよしと」

「おにい、なんだか怖い」

榆里がぎゅっと神士の腕にすがってくる。

話を半分程度しか理解してなくとも、これから何か途方もないことが始まるのを、薄うす感じているのだった。

震える榆里の手を、神士は強く握る。

山之辺が何かを起こす。

創世という名の、何かを。

それによって、この世界がどうなるのかは神士にも予想がつかない。

ただ、自分の中のあるものが決定的に喪われる。そんな息苦しい予感がした。

「よし、周辺宙域のキャストを四、五十名補足することに成功した。彼らは来るべき新世界の礎として歴史にその名を刻む」

「歴史か」

「むろん、キミたち兄妹もその中に含まれる」

山之辺はタッチパネルの決定ボタンを押すと、開いたウィンドウの最終意志決定ボタンを呆気なくクリックした。

瞬間、世界の動きがにわかに加速した。

銀の円筒が猛烈な勢いで回転し、周囲の物体を引きつけはじめる。

吸い寄せられると思い、神士は榆里を庇って身構えた。が、体が持って行かれる気配はない。

目の前で凄まじく荒れ狂う風が、研究所周囲の壁を次つぎと呑み込んでゆく。空間そのものがバラバラに刻まれ、微細な粒子となっ

て円筒中心部の吸気口へと呑まれる。

「ち、地所がどんどん吸われてる？」

「そうだ。亜空に呑み込まれた物体は、ことごとくこのアラヤシキが吸塵する」

ラボのコンクリート壁が、まるで和紙か何かで出来ているようにくしゃくしゃになる。苛烈な空間歪曲によって、建物がどんどん歪められ、粉々に分解されてゆく。

「さよなら、彩……」

山之辺は一瞬、父親の顔になると、円筒の中へ吸い込まれてゆく冷凍庫と氷漬けの少女を、哀悼の念をこめて見送った。

その姿が次第に薄らいでゆく。

アラヤシキの影響が、無機物だけではなく、有機物にまで及びはじめたのだ。

「な、なんだこれ。体が、どんどん崩れて」

「お兄ちゃん！」

榆里が泣き叫び、抱きつこうとする。

「榆里！」

だが、二人の手は離れ、兄妹はバラバラにされてもろとも円筒内へ吸収された。

すべての作業をやり終え、精根尽き果てた山之辺の肉体も呑み込まれ、単なる色彩の渦となって混ざってゆく。

「祝福しろ。新たな世界の誕生だ」

きら星のようなさんざめく光の中、山之辺の高笑いが神士の稀薄な意識に届いた。

そして、

創世は行われた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9532v/

新世界デフラグ機構

2011年11月11日03時12分発行